

『北彩都あさひかわ』～都心再生・川からのまちづくり

旭川市都市建築部駅周辺開発課
区画整理担当課長 斉藤 郁生

1. はじめに

旭川市は、北海道のほぼ中央にある肥沃な上川盆地に位置し、市域面積747.60km²、人口約35万2千人の北海道第2の都市であり、平成12年4月1日に中核市になりました。

明治23年に旭川村として開村し、同31年の官設鉄道の開通や同34年の第七師団司令部（現在は陸上自衛隊第2師団が駐屯）の札幌からの移転を契機として、その後、鉄道や国道等の道路も整備され、交通の要衝となるにつれ街は一層発展してきました。

市内には、大雪山連峰に源流をもつ一級河川の石狩川とその支流の忠別川、美瑛川、牛朱別川の大きな4つの川が市街地を貫流するなど大小168の河川があり、水と緑豊かな「川のまち」でもあります。明治35年1月25日には、日本最低気温となる氷点下41度を記録するなど厳しい冬ながら、ダイヤモンドダスト（細氷現象）などの幻想的な景観が見られるのも魅力的です。



写真1 大雪山連峰を望む石狩川が流れる旭川市街地

近年では、“行動展示”で全国的に熱い注目を浴びた日本最北の旭山動物園やブームの先駆けとなった旭川ラーメンなどで知名度がアップしてきています。

2. 中心市街地の動向

本市の中心市街地は、JR旭川駅前から繋がる平和通買物公園を中心に形成され、都心商業・業務・行政・文化・飲食・娯楽等の機能を備えています。平和通買物公園は、昭和47年に当時国道であった駅前の幹線道路を「人間のための道路」として日本で初めての恒久的歩行者専用道路として誕生させたもので、当時は画期的な取組として注目をされました。前年には、実際に車の通行を止めて、歩行者が道路空間で憩う今日的な“社会実験”を実施し、その結果をもって官側の説得がなされ、翌年の誕生につながりました。

そんな誕生経過を持つ平和通買物公園周辺を含む中心市街地も次第に市内の幹線道路の整備が進む中、郊外型商業施設等の出店が続く、駅前地区からも郊外に移転し、また、最近では老舗百貨店が閉店するなど、衰退が見て取れ、相対的に本市における中心性が低下してきています。

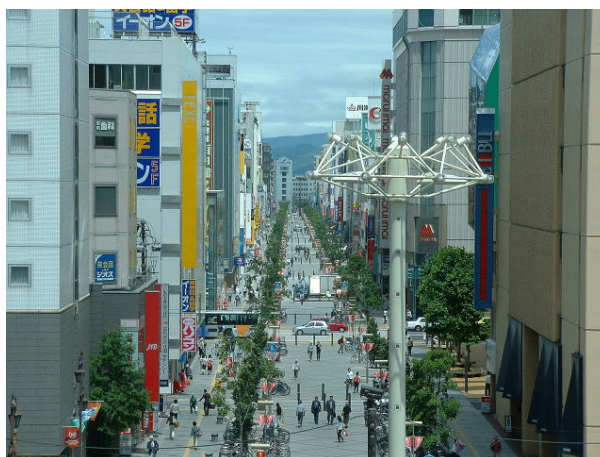


写真2 平和通買物公園と周辺地区

3. 都心再生と北彩都あさひかわ

徐々に中心性が薄れつつあった昭和60年代、本市では都心部（中心市街地）の将来像について検討し、都心部の南側に位置する神楽地区に新たな都心機能（広域的な文化・スポーツ・コンベンション機能）を付加することで都心地区を拡大することとし、旭川大雪アリーナ（開館S61）、道北地域旭川地場産業振興センター（同S62）、大雪クリスタルホール（同H5、博物館・音楽堂・国際会議場の複合施設）を先行的に建設・供用させました。残る大きな課題は、当時の国鉄の鉄道用地と忠別川によって南北に分断された都心部と神楽地区の両地区を結ぶための橋梁の整備でした。

そうした中、昭和62年に国鉄の分割民営化が行われ、新たに土地利用転換が可能な広大な土地が生まれることになり、本市としても計画的な開発によって様々なまちの課題を解決するために本格的に調査・検討を進めました。

その結果、鉄道の高架化や土地地区画整理などの都市基盤施設整備事業を一体・複合的に推進することで、国鉄跡地など空閑地や鉄道を高架化することにより利用可能となる土地を新たな拠点地区として活用し、都心部の中心性の回復を図るとともに、懸案となっていた忠別川で分断されていた都心部と神楽地区の連続化を実現させるための3本の橋梁整備を含む幹線道路の整備を行うことなどを決めました。これらの事業の総称として「北彩都あさひかわ整備事業」と呼んでいます。

（「北彩都あさひかわ」は、事業に長い期間を要するため、市民等へのPRや人々に親しまれ浸透するように愛称名として全国公募したもので、約5,000件の応募の中から選ばれたものです。）

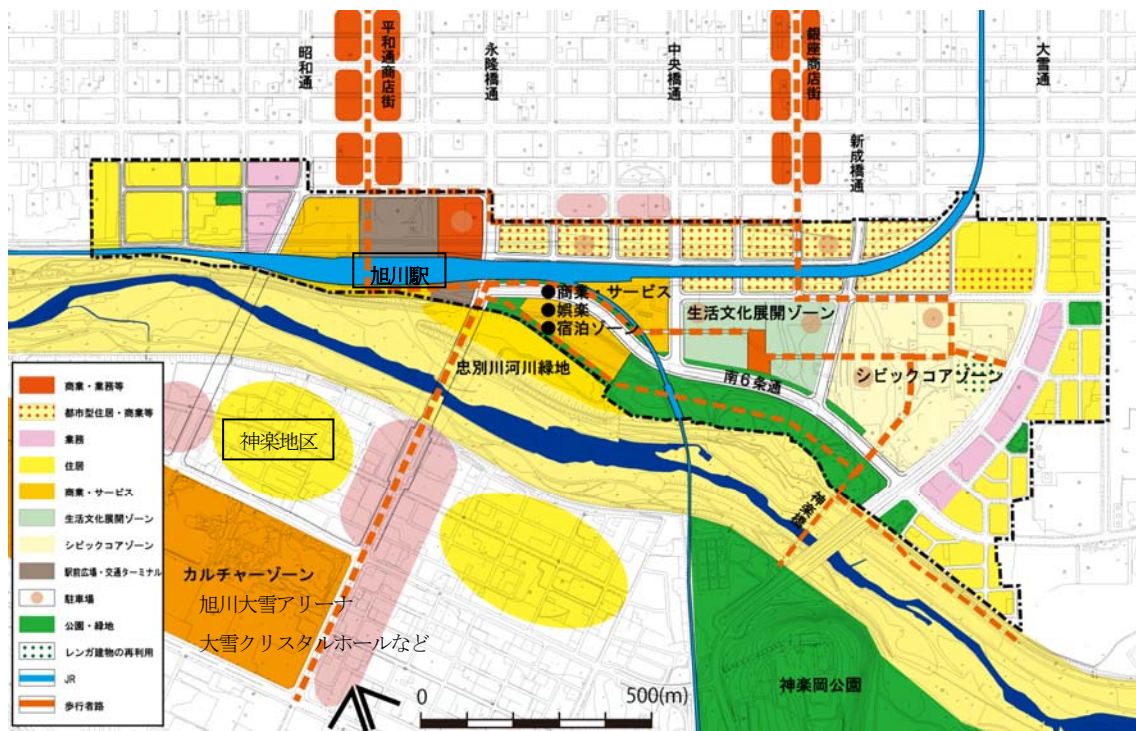


図1 「北彩都あさひかわ」土地利用計画図

4. 「北彩都あさひかわ」のコンセプトと整備方針

豊かな自然と都市環境が調和する暮らしやすいまちを目指して「北彩都あさひかわ」のコンセプトは、『都心ルネッサンス・旭川』～人々の楽しく集う空間、未来形の都心～を掲げ、柱となる4つのコンセプトを次のとおりとし、整備方針を図2のとおりにしています。

柱となる4つのコンセプト

【都心拠点の形成】

北の生活文化産業の融合拠点づくり

【都心オアシスの形成】

自然と融合する都心づくり

【躍動都心の形成】

活き活き躍動する都心づくり

【未来都心の形成】

旭川のメインステージづくり

5. 「北彩都あさひかわ」の主な事業概要

「北彩都あさひかわ整備事業」の内、平成8年には鉄道高架、区画整理及び関連街路が都市計画決定され、平成10年には鉄道高架、区画整理の工事が本格的に着工となりました。

(1) 旭川鉄道高架事業

- 総延長 約3.5km
(函館線、宗谷線、富良野線)
- 事業費 約601億円
- 事業期間 平成10年度～平成23年度
- 事業主体 北海道

図2

『北彩都あさひかわ』の整備方針

中心市街地の現況と課題を踏まえ、『北彩都あさひかわ』の整備を次のような方針で進める。

- ① 鉄道の高架及び忠別川を横断する南北道路の整備
- ② 旭川市発展のための新しい機能の導入
- ③ 忠別川的环境を活かした都心部の形成
- ④ 楽しく賑わいを演出する都心部の形成

整備方針を実現するため、具体的には次のような整備計画で取り組む。

- ① 新しい都市機能の導入
- ② 川と市街地との融合
- ③ 大規模な緑地空間の確保
- ④ 快適な住宅市街地の形成
- ⑤ 既成都心部と連続した市街地の形成
- ⑥ 緑豊かな駅前広場の整備
- ⑦ 水と親しめる大池の整備
- ⑧ 川の空間を市街地に引き込むための沿道緑化
- ⑨ 街並みをつくる建築物の配置

北彩都あさひかわ地区における象徴的な事業で、限度額立体交差事業によりJR旭川駅を中心に線路を高架化するとともに駅舎も新設します。鉄道高架は、昨年10月10日に供用が開始され、同時に新しい駅舎も1次開業しました。本年11月23日には、駅舎のグランドオープンが予定されています。高架下には、本市の観光物産情報センターや彫刻美術館のサテライトを設置します。



写真3 北彩都あさひかわ地区全景と事業箇所

(2) 旭川駅周辺土地区画整理事業

- 施行面積 約86.2ha ○事業期間 平成8年度～平成26年度
- 事業費 約227億円 ○減歩率 42.2% (公共35.1%, 保留地7.1%)
- 施行者 旭川市
- 整備概要・都市計画道路：南北方向5路線 (昭和通, 永隆橋通, 中央橋通, 新成橋通, 大雪通)
東西方向3路線 (宮下通, 宮前通, 南6条通), 延長約4.2km, W=21.0～35.0m
- ・宮前地区公園 (約5.4ha), 街区公園4か所, 緑地
- ・駅前広場 (約2.2ha), 多目的広場 (約0.38ha)

旭川駅周辺土地区画整理事業の施行地区は、既存都心部と忠別川の間に位置し、JR旭川駅を挟み東西約2.2km, 南北約0.2～0.9km, 面積約86.2haで、旧国鉄用地がその約88.5%を占めています。(平成9年に旭川市土地開発公社で約32haを購入しています。)

この広大な土地は、『都心ルネッサンス・旭川』を具現化するための大きなキャンパスです。鉄道高架や道路・公園などの公共施設用地を確保することに止まらず、新たな都心機能の導入等による都心機能の充実・強化を図るとともに河川空間などの自然と調和した市街地を形成する「川からのまちづくり」のためには、如何に未来に向けた良い絵が描けるかが重要になります。

そのため、計画当初より土地利用計画だけではなく、ランドスケープデザインを重視し、都市空間構成の考え方や忠別川のもつ緑豊かな自然をどう取り込んでいくか、どういう“しつらえ”が望ましいのかなどについて検討を重ねてきました。

また、土地利用計画や施設計画は、ハードだけではなく、地区計画や都市景観条例などのソフトともタイアップして計画づくりを進めてきました。

地区計画については、平成10年度に地区計画の方針と一部の地区整備計画を決定し、その後、用途地域の変更とともに5回の変更を経て平成22年度に全地区について決定されました。

景観条例(H19)においては、「北彩都あさひかわ地区」は景観計画重点区域に指定され、「街並み形成協議会」で、建築物の新築等について事業者と協議を行っています。

(3) 関連街路事業

関連街路事業は、忠別川に3つの橋を架ける幹線道路整備ことで、南北の市街地分断を解消するための事業です。

この内、新神楽橋(北海道施工)は、交通渋滞解消のため、4車線化等を行い平成15年度に開通し、2つの国道を連絡する幹線道路として、重要な役割を担っています。

残る2つの「氷点橋」と「クリスタル橋」は、これまで鉄道用地と忠別川



図3 「北彩都あさひかわ」の整備イメージ

に隔てられていたため、幾度も橋梁整備を検討するも実現に至らなかったもので、本市の“長年の夢”というべき橋です。3橋の設計にあたっては景観計画をたて、先行した新神楽橋は、背景となる神楽岡総合公園の丘陵地にマッチするようにアーチ橋としたことから、この2橋はペアの姉妹橋として統一感を出しながらも、駅から川に出たときに豊かな自然を印象づけるため、橋の形状は、極度に「橋梁デザインが主張しない」計画として上部構造のないシンプルな桁橋としました。

「氷点橋」(北海道施工)は、本年4月1日に完成し、橋の完成を長い間待ち望んでいた神楽地区の住民等による渡橋式が行われました。「クリスタル橋」(旭川市施工)は、平成25年度の供用開始を目指し工事が進んでいます。(橋名は、昨年10月公募により決まったもので、地元作家、故・三浦綾子さんの代表作にちなむ「氷点橋」、神楽地区に建つ旭川市大雪クリスタルホールにちなむ「クリスタル橋」となりました。)

6. 川からのまちづくり

「北彩都あさひかわ」地区全体で「都心オアシスの形成」のコンセプトのもと、忠別川の自然豊かな環境を活かした「川からのまちづくり」を目指すため、ランドスケープデザインによる都市空間構成の考え方や検討された“しつらえ”(具体化の方策)に基づき整備を進めています。

(1) 都市空間構成とスーパーブロック化

鉄道高架より南東側に誕生する広大な土地については、新たな都心機能の導入を図る土地利用に合わせスーパーブロックでの利用とし、駅から東に向かう程、都市性の高い空間から自然環境性の高い空間とするため、テーマゾーンには、硬質の多目的広場を配し、また、シビックコア地区には、既存樹木の保全や緑豊かな円環広場を設置することとしました。

(2) 忠別川河川空間と帯状の緑地空間の確保

自然環境の活用に係わってリニアーで広域的な空間である忠別川と一体的な自然豊かな市街地空



図4 「川からのまちづくり」の主な整備イメージ

間を形成していくため、川沿いの都市空間において大規模な地区公園等の緑地空間を確保しました。

忠別川河川空間は、「忠別川水辺プラザ整備計画（H11）」の事業として河川管理者である国（北海道開発局）の協力のもとに河川敷地内の整備を行っており、忠別川の原風景を思い起こさせるような在来種の野草類を階段状に植栽している「生態階段」（植栽帯）を始め、旧霞堤を活用した大池の整備や堤防の緩傾斜化による遊歩道の整備など川との出会いがより印象深いものとなるような空間を形成しています。

また、地区公園は、この河川空間と一体的な利用が可能となるように川に沿って帯状に配置しています。公園の端からは、大池に接する“緑のプロムナード”の整備を計画しています。

（３）緑豊かなシビックコア地区

シビックコア地区では、平成8年度に「旭川シビックコア地区整備計画」の国の承認を受け、国の合同庁舎の新築を始め（H20年開館）、本市の公共施設（障害者福祉センター（H14年開館）、科学館（H17年同）、市民活動交流センター（H22年同））の建設を行いました。

シビックコア地区と忠別川河川空間との連携を強くするため、地区公園と円環広場は、南6条通の人道橋で結ばれており、この街区中央部の円環広場は、それぞれの土地所有者が敷地境界に柵や塀を設けず、一体的に誰もが自由に利用できる空間としています。

（４）川のある駅舎

鉄道の高架化改築については、計画当初、現線路がある位置で高架化する①案と忠別川のある南側に70m程移設して別線方式により高架化する②案の2つの案について検討しました。その結果、②案を採用することにしましたが、これは、施工性の容易さや事業費の低さ等の理由のほか、何よりも自然豊かな忠別川に接する駅舎とすることで、全国的にも類を見ないような「川のある駅舎」をつくりたいとの強い思いがありました。そうすることで駅舎は単なる乗降機能だけではなく、「北彩都あさひかわ」のシンボルとして、しいては“旭川の顔”として新たに生まれ変わらせようと考えました。そのため、駅舎の外壁にはガラスを多用することにより、都心と川を繋ぐ駅として、都市の活動や忠別川の豊かな自然を眺め・感じる事が出来るようにしつらえることにしました。



写真4 完成間近な駅舎と開通した氷点橋

7. おわりに

「北彩都あさひかわ整備事業」及び関連事業のすべてが完了するのは、平成26年度の予定です。

本年3月25日付けで「旭川市中心市街地活性化基本計画」の国からの認定を受け、いよいよこれから活性化のためのあらゆる手立てを取って行くことが求められる時です。「北彩都あさひかわ整備事業」もその中核をなす事業の一つですが、ようやくハードのプラットホームが出来上がろうとしている段階です。新たに誕生した宅地にいかに有用な機能導入を図っていけるのかが問われています。「川からのまちづくり」を大切にしながら進めてきて、その魅力を最大限に活かしていけるようにこれからも事業を推進して参りたいと考えています。その一つとして、これから「北彩都ガーデン」事業も息の長い取組みとなりますが、“ちょっと夢のある事業”に育っていけばよいなと思っています。